要約

論文題目：青年音楽運動の思想圏

申請者：牧野　広樹

本論文は、20 世紀前半のドイツで興隆した青年運動の一部である青年音楽運動について、その多層性を浮き彫りにし、思想的射程を考察するものである。論文は、青年運動と音楽との関連を概略する序論、青年音楽運動の先行研究史を概観したうえで、本研究の基本的視座を提示する第一部（歴史的検討）、指導者論、共同体論、聴覚論、技術論という四つの観点から青年音楽運動の多層性を浮き彫りにする第二部（文化論的検討）、青年音楽運動の政治的評価を、今日におけるメタ的観点から再検討する第三部（政治思想的検討）、青年音楽運動の前史としての第一次世界大戦前のヴァンダーフォーゲルと民謡の関わりを論じる補論の計五部で構成される。

序論では、青年運動の概略史とその音楽との関わりを簡潔に概略し、本論への導入とした。

第一部第一章では、1930 年代初頭における青年音楽運動の評価を、ドイツ青年運動史料（Archiv der deutschen Jugendbewegung）の未出版史料をもとに考察した。今日において青年運動は、しばしば「保守主義的」で「民族主義的」な運動として位置づけられている。しかし 1933 年前後には、青年音楽運動の代表的な活動家であるフリッツ・イェーデ（Fritz Jöde, 1887–1930）は、プロイセン文化省の参事官、レオ・ケステンベルクとの関係から、「マルクス主義的」であり、民族主義に反する国際主義を標榜しているとして批判されていた。1933 年のナチ体制成立時に、イェーデはナチ体制下における青年音楽運動の活動継続を進める決定を下す。この決定は、多くの青年運動の指導者と同じく日和見主義的なものであったが、1934 年には、このような誹謗中傷による圧力のもとで、ナチ体制への協力を明確に言明することとなる。

第一部第二章では、第二次世界大戦後における青年音楽運動の評価を考察した。第二次世界大戦後における青年音楽運動の評価は、主に否定的評価と肯定的評価に二分される。否定的評価に代表されるのは、アドルノによる青年音楽運動批判である。彼の批判の要点は、青年音楽運動における教養市民層的性格、「音楽教育的音楽（musikpädagogische Musik）」、そして全体主義的傾向の三つにまとめられる。アドルノによれば、青年音楽運動は、19 世紀の教養市民層と連続した過去回帰的な運動であり、それゆえ市民社会への反抗を標榜し

ながら、何ら市民社会の変革をもたらさない運動である。また、その活動は、共同体形成や人間教育という、音楽それ自体とは別のところに目的を持つ「音楽教育的音楽」であるとされる。この「音楽教育的音楽」は人間同士のつながりを形成することによって、疎外された社会の変革を標榜しているが、既存の社会内におけるこのような改善の試みは非人間的なものを隠蔽するだけで何ら社会を変革しないというのがアドルノの主張である。アドルノが価値をみいだすのは、「異化作用」を発揮する芸術のみであり、そのような芸術こそが、社会の変革を可能にするというのである。そして、アドルノが最も批判の重点を置いたのは、その全体主義的傾向である。共同の音楽行為によって人間を組織化することは、彼にとって、異他的なるものを排除し、同質化を求める全体主義的な行為に他ならない。それゆえに、青年音楽運動は、彼にとって強い批判の対象とされているのである。一方で、肯定的評価は、音楽教育学的な観点から、青年音楽運動の現代的アクチュアリティを主張している。改革教育の文脈に沿った音楽教育のあり方は、確かに現代においても一定の有効性を持ちうるものであろう。この二つの評価に共通しているのは、どちらも青年音楽運動の一面のみを強調して論じていることである。否定的評価は、ヒトラー・ユーゲントへの統合という歴史的帰結のみを重視し、現在の高みから青年音楽運動を断罪しようとする一方で、肯定的評価はそのような歴史的帰結を等閑視している。これを踏まえたうえで、本論文では、青年音楽運動を、当時において多様な未来を拓く可能性を懐胎していた運動として捉え、その多層性を多角的に分析する。そのために、歴史的事象の現在性を重視する「サイドシャドウイング」という立場をとることを、本章において基本的視座として示す。

第二部第一章では、指導者論の観点から青年音楽運動を考察した。英雄的な性格で世界を救済し導く「指導者（Führer）」の待望は、20 世紀前半において様々な地域で見て取ることができる。そのような風潮のなかで、フリッツ・イェーデの指導者像は、「導かない指導者」ともいうべき、特異なものとして構想されていた。本章では、彼の指導者像を、改革教育において典型的な指導者像を提示し、青年運動の指導者でもあったグスタフ・ヴィネケン（Gustav Wyneken, 1875–1964）のものと比較することによって浮き彫りにする。

第二部第二章では、共同体論の観点から青年音楽運動を考察した。青年音楽運動の代表的なグループ、「楽師ギルド」に関わった、フリッツ・イェーデ、ゲオルク・ゲッチュ（Georg Götsch, 1895–1956）、ハンス・フライヤー（Hans Freyer, 1887–1969）の著作をもとに、彼らの共同体像における芸術的メタファーを探るとともに、その共同体の形成において音楽実践がどのような役割を担っていたかについて考察する。イェーデにおいて重要な芸術

的メタファーは、「ポリフォニー」である。彼は、多様な構成員がポリフォニー的な連関のもとに一つの作品を織りなす様相を理想的な共同体像として構想した。ここにおいて、音楽実践はその作品形成のための対話の契機として位置づけられている。ゲッチュにおける重要な芸術的メタファーは、「イングランドの形式舞踊」である。彼は、個々の人間や小集団がそれぞれ独立を保ちながらつかず離れずの関係を保つ共同体像を、イングランドの形式舞踊に見出した。ここにおいて音楽実践は、その小集団を形成し、それらをネットワークで繋げる役割を担った。フライヤーは、「音楽が生成される構造」のうちに、理想的な共同体像を見出している。音楽作品が絶えず実践を通して生成構築されるように、共同体もまた人間の実践によって絶えず生成構築される。この構造は国家にまで敷衍され、彼の共同体論を支えることとなる。

第二部第三章では、聴覚論の観点から青年音楽運動を考察した。本章では、「聴覚」という感覚が、青年音楽運動においてどのように意味づけられてきたのかを、ヴァルター・ヘンゼル（Walter Hensel, 1885–1956）とハンス・フライヤーという二人の活動家における聴覚論を検討することによって明らかしたうえで、その聴覚論の孕む問題性を、共同体のポリティクスに関連させつつ検討する。ヘンゼルの要請する聴覚とは、「秩序化された小世界」としての「水晶」に比せられる民謡から、同じ人種、言語、慣習、習俗からなる民族による共同体へと向かう未来の志向性を聴き取ろうとする聴覚である。一方フライヤーは、共振する鼓膜が、存在論的・共同体論的な意味へと敷衍され、人間の共同性を担保する感官として、聴覚を位置づけている。しかしながら、彼らのいう「聴覚」は、人間の共同性に開かれていると同時に、「民族（Volk）」に向かって閉じられており、その共同性は暴力性と巧妙に表裏一体となっていたことが、二人の聴覚論から明らかになる。

第二部第四章では、技術論の観点から青年音楽運動を考察した。青年音楽運動は、その出自からして、ロマン主義的性格、反近代的性格を持っているとされてきた。本章では、そのような歴史的評価に関して、音響メディアという観点から再考を試みる。そのために、主としてラジオとレコードに関する青年音楽運動の言説を調査し、この運動におけるレコードに対する評価の変遷及びラジオ放送に対する態度の変化と、それらが 1950 年代の技術論にどのように帰結したのかを明らかにする。彼らの音響メディアに対する態度は、1920 年代初期は否定的であったが、その後、レコードの技術改良やラジオの活用可能性が見出されることによって変化していくこととなる。そして、戦後活動が再開された 1950 年代には、基本的には技術社会に対して否定的な態度を取りながらも、部分的には技術を利用しつつ運

動を継続していくという態度が見られる。このように音響メディアという観点から青年音楽運動を検討することによって、この運動を、近代と反近代の入り混じった結節点にある運動として捉えることができる。

第三部第一章では、フリッツ・イェーデの音楽観にみられる共同性の思考とその変遷を、彼の著作にみられる「共在（Beieinander）」と「統一性（Einheit）」という二つの語をもとに考察した。「共在」の位相における音楽表現の目的は、音楽実践を契機として、様々な人々が集い、対話が生まれることにあった。この位相は、多様性を重視するポリフォニー的思考によって成り立っており、いわゆる今日のコミュニティアート的実践に類似する点が多く見受けられる。一方、「統一性」の位相では、まずドイツ民族の統合が目的として設定され、ドイツ民族の一体化と同化を進めるための求心力として、音楽表現の目的が規定された。

第三部第二章では、1934 年の回顧録をもとに、イェーデがナチ体制成立後にいかなる社会的目的を持つものとして青年音楽運動を位置づけたかについて考察した。孤立する人間が相互の関係を取り戻すための試みとして始まったイェーデの活動は、次第に「民族（Volk）」という枠組みを意識するようになる。そしてナチスドイツ成以後、1934 年の著作において、イェーデは、それ以前の「青年音楽（Jugendmusik）」を党派や宗派、家庭という境界線を解体し、それを民族というより広い概念へと拡張する試みであったと位置づけている。しかしながら、ナチ政権への順応として彼が回顧的に自身の活動の自己正当化を図った可能性は否定できない。このことを鑑みると、イェーデが活動当初から「民族の統合」という社会的目的をどの程度明確に持っていたかという点には留保を付さねばならないと考えられる。

第三部第三章では、青年音楽運動における「民主主義」と「保守主義」の連関について考察した。本章では、カール・シュミット、ユルゲン・ハーバーマス、シャンタル・ムフによる「民主主義」に関する政治的理論を補助線としつつ、青年音楽運動における「民主主義」の意味を整理し、理解することで、青年音楽運動がいかなる意味で「民主主義」的であり、そしてまたそれが「保守主義」とどのような連関にあるのかを明らかにする。このような作業によって、青年音楽運動に関する政治的評価を、今日におけるメタ的な観点から再検討することができるとともに、その評価を、現代もなお議論の続く「民主主義」をめぐる問題系と接続させつつ考察することができるようになる。

補論では、本論で扱うことのできなかった、第一次世界大戦前の青年運動と音楽の関わりについて、ハンス・ブロイアー編纂の『ギター弾きのハンス』の序文を中心に、第一次世界大戦前のヴァンダーフォーゲルにおける民謡の位置づけについて考察した。ヴァンダーフ

ォーゲルにおいて、民謡は、ただ〈ドイツ的なもの〉の表象としてだけでなく、〈ドイツ的なもの〉と〈普遍的なもの〉のアマルガムを違和感なく体現する概念装置として成立していた。これによって、民謡は、第一次世界大戦参加への論理構造としてアクチュアルに現実に作用していくこととなる。

結論では、本論文の研究の成果をまとめた。本論文では、歴史的文脈を抜きにして青年音楽運動に肯定的、中立的、否定的評価を与えるのではなく、あくまで歴史的文脈のなかで、その思考の「揺れ」の様相を一面化することなく明らかにすることを試みた。本論文では、ヴァイマル共和国期における歴史的文化現象であると同時に、今なお示唆に富む様々な思考の糧を提示する運動として、青年音楽運動を位置づけてきた。この「歴史化」の作業において現れ出るアクチュアリティこそ、われわれがなお考察に値するものである。